

1 むらづくりの主体

(1) 名称 とよみむらのうさんぶつとうはんにゆううんえいいいんかい
 豊富村農産物等搬入運営委員会

(2) 所在地 やまなしけんちゅうおうしとよみちく
 山梨県中央市豊富地区

(3) 地区の規模 集落の集合体

(4) 組織の性格 機能的な集団等

(5) 代表者の氏名、役職及び住所

氏名 とのおか とらお
 殿岡 虎雄

役職 会長

住所 やまなしけんちゅうおうしとかべ
 山梨県中央市高部 1 5 1 3



白地図KenMapの地図画像を編集

2 地区の概要

総人口	農(林、漁)業 就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
3,647人	550人	1,084戸	1,350ha	317ha	- ha	550ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第 種兼業農家	第 種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業の農家
427戸	304戸	63戸 (20.7%)	80戸 (26.3%)	161戸 (53.0%)	88戸 (29.0%)	59戸 (19.4%)	157戸 (51.6%)
地域指定状況				農業地域類型区分			
農業振興地域(平成46年度指定) 過疎地域(平成2~11年度) 準過疎地域(平成12~16年度) 森林整備地域(平成11~19年度)				市 町 村		当 該 地 区	
				中間農業地域		中間農業地域	

3 むらづくりの背景・動機

旧豊富村（市町村合併により、平成18年2月20日から中央市。）は、全国でも屈指の養蚕の村であったが、時代の流れとともに、農業離れや高齢化が進み、さらに繭の輸入自由化による繭価の低迷が拍車をかけ、養蚕業は衰退の一途をたどった。丘陵地帯の桑園はたちまち遊休化し、病害虫の病巣となって、生活環境の悪化をもたらし、また、青壮年層は旧村外の他産業へ転職して、旧村全体の活気が失せていた。

このようななか、農業委員や村議会議員、区長等を主な構成員とする村経営基盤強化推進委員会等で真剣な議論がすすめられ、その結果、傾斜地での栽培が可能で、気候的にも適し、将来性と高収益性が見込まれる養蚕の転換作物として、モモを産地化する方向性が示され、遊休桑園の抜根整地や農道整備が行われた。

モモの団地化とともに、集出荷施設等の整備による生産性の向上も図られ、農家に活気がよみがえってきた。また、普通畑や水田の転作作物として、スイートコーン、なす等を推奨し、特にスイートコーンは、養蚕の堆肥や桑がら等の投入による肥沃な土地と、昼夜の温度差、日照時間などが適し、品種選定も功を奏した。時期に応じた多様な作型により、関東では早場の産地として高値で取り引きされ、全国に名を馳せるまでになっている。

このように「平成の一大農業転換期」ともいえる時期を乗り越え、農家の生産意欲や所得の向上が図られてきたが、さらなる販路の拡大と地域全体の活性化を図るため、平成9年度に農産物直売所が整備された。さらに、直売所の完成を心待ちにしていた先駆的な農家37名（平成16年度末には210名（うち女性33名））が集まり、平成10年3月に豊富村農産物等搬入運営委員会を発足させた。同年3月20日には、農産物直売所がオープンし、「道の駅とよとみ」は有利な立地条件で一躍脚光を浴びることになった。

「新鮮・安全・安心・安価な農産物の提供」を主な事業としながら、都市交流と農業生産の向上を目指す組織として誕生した同委員会は、平成14年2月に発足した、農地保有合理化法人の(財)シルクの里振興公社と連携し、機動的かつ弾力的に直売所等の管理運営を行い、現在では年間300品目もの農産物を供給し、1億円を超える売上を得ている。

4 むらづくりの内容及び成果等

(1)エコファーマー、認定農業者の増加

直売所で、消費者からの声を直接受けるなか、会員1人1人が、安全、安心な農産物を安定して生産するために、土づくりや農薬の削減技術の導入に取り組むようになり、同委員会では講習会などを通じて、エコ農業への取組を推進している。直売所内にエコファーマーコーナーを設けたり、会員名簿やのぼり旗を掲示するなどして、安全、安心のPRを積極的に行っている。

また、直売所での売上が増加するなか、計画的に農業経営を改善していく姿勢もみられるようになり、認定農業者も毎年数名ずつ増加している。



直売所内のエコファーマーコーナー

【 成果等 】

エコファーマーの認定を受ける会員は増加しており、現在は60名（男性47名、女性13名）である。（16年度末）

認定農業者：4名（平成7年度） 64名（男性37名、女性27名、うち9割が会員）（平成16年度）

平成8年には、認定農業者会を設立。

(2)環境保全型農業への取組

旧村域では、平成8年度までに、農業集落排水事業による全村下水道が完備し、その処理施設から排出される汚泥はコンポスト肥料として再生されており、平成17年度からは、家庭から出る生ごみも回収し、融合コンポスト肥料として農地に還元されている。

このように、「新鮮・安全・安心・安価な農産物の提供」の実践のため、減農薬栽培や、コンポスト肥料などを使った減化学肥料栽培に積極的に取り組み、環境に配慮した循環型社会を目指している。

【 成果等 】

全村域に農業集落排水が行き渡っている。

会員は、資源循環型農業を意識し、コンポスト肥料等を活用するとともに、畜産農家と土づくり協定を行い、有機質肥料を利用した栽培を進めている。

・ コンポスト肥料利用農家数：91戸（平成12年） 141戸（平成16年）

(3)女性会員の活躍

同委員会は1軒で1名の登録制になっているが、男性の名前で登録してあっても、実際は約7割の女性が収穫、搬入しており、パソコンに向かって商品ラベルをつくり、農産物に貼る作業も、女性の手慣れた作業で行われている。

従来から、食生活改善推進員グループや生涯学習事業等での味噌づくりや、畜産振興協議会ではハムづくりが女性を中心に毎年盛況に行われてきた実績を踏まえ、平成13年度に農畜産物処理加工施設「与一味工房」が整備され、会員女性等10名で発足した「味工房うまいもん」を中心に、自分たちで育てた野沢菜、大根、大豆等を使って、減塩の浅漬けや味噌等の開発・製造に取り組んでいる。



直売所で商品ラベルを作る生産者



手づくりで人気の「とよとみハム」

【 成果等 】

商品ラベルには、女性の名前が多い。

販売も順調に伸び、味噌が需要に追いつかない状況もしばしある。

- ・ 漬物：10種類、味噌：2種類

(4)学校給食等への食材提供・食農教育等の推進

旧豊富村には小学校が1校あり、年間を通して、会員が生産したジャガイモ、大根、玉ねぎ等の野菜を、給食食材として提供しており、(財)シルクの里振興公社で製造するウインナー類とともに、年々使用量も増えている。

さらに会員の指導により、同校の小学生が大豆を栽培し、与一味工房で味噌づくりを行うなどの農業体験も行われており、農業理解を深める効果をもたらしている。(16年度は5年生を対象に実施)

【 成果等 】

平成15年度の納入実績：263,000円(11品目)

(5)グリーンツーリズム事業

委員会設立当初から実施してきた「スイートコーン収穫祭」などのイベントを通して、会員は販路の拡大が図られることの喜びを体感し、積極的にのぼり旗を掲げ、ハッピーを着込んで、朝採りの新鮮さや、土づくり、農薬削減の取組などを、消費者にアピールするとともに、消費者から生の声を聴くなど、ふれあいを楽しみながら販売している。



スイートコーン収穫祭



イチゴ狩りツアー

【 成果等 】

毎年5月に開催の「スイートコーン収穫祭」は、日本一早く収穫祭が行われ、近隣市町村はもちろん、県外からも人が訪れており、現在では約50,000本のトウモロコシを販売するなど、約8,000人の集客を誇るイベントとして定着している。

収穫体験ツアーは、「とうもろこし収穫体験ツアー」をはじめ、会員の発案により他品目でも企画し、現在では、イチゴ、なす、枝豆、野沢菜などでも実施しており、15年度は275日の実施で、51,983人の集客をあげている。

【むらづくり推進体制】

